

## ルカによる福音書6章12-49節 「神の国の生活」 パート1

### 1A 十二使徒の選出 12-19

### 2A 平地の垂訓 20-49

1B 幸いと災い 20-26

2B 敵への愛 27-38

1C 憎む者への祝福 27-31

2C 報われる慈善の行ない 32-38

3B 師からの学び 39-45

4B 深みにある告白 46-49

## アウトライン

ルカによる福音書 6 章 12 節から読んでいきます。

### 1A 十二使徒の選出 12-19

12 このころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。

イエス様は、ご自身の教えと権威によって宣教の働きを行われてきました。悪霊を追い出し、病人を癒し、会堂や岸辺で御言葉を教えられました。そして弟子たちを呼び出されました。ペテロとヨハネ、ヤコブ、それからマタイもいました。その中で、パリサイ人や律法学者らとの対立が始まります。イエス様が罪の赦しを宣言され、それは神にしかできないとつぶやくところから始まり、取税人たちと食事をして非難を受け、断食を弟子たちがしていないとの批判を受けました。そしてイエス様は、ご自身の権威と言葉による働きを「新しいぶどう酒」に例えて、彼らの働きを「古いぶどう酒」に例えました。新しいぶどう酒は新しい皮袋でなければ、受け入れることはできません。このようにして、私たちが絶えず、イエスのもたらす神の国を受け入れるための新しくされた心が必要であることを教えています。

そして安息日のことで対立しました。弟子たちが麦畑の穂を食べたことでパリサイ人と律法学者が非難しました。次に安息日の会堂で、右手のなえた人を彼らはじっくり見っていました。イエスは、「安息日にするのは、良いことか、悪いことか？」と聞かれて、そしてその人を直されました。こうして彼らはひどく怒り、イエスをどうしてやろうかと話し合ったのです。

そして、イエス様は祈るために山に行かれたのです。そして夜を明かすほどに祈られました。この祈りは、ある人々はゲッセマネの祈りの次に重要な祈りであったであろうと言います。なぜなら、次にイエス様が十二使徒を選ばれるからです。

13 夜明けになって、弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をつけられた。

人となられた神である方が、キリストが地上に来られるということは、神の国が地上に到来したことに他なりません。私たちは再臨のキリストがこの地上に戻ってこられて、全く新しい秩序を打ち立ててくださることを知っています。しかし、初めに来られた時にもイエスご自身がおられるということで、地上に神の権威と力が入り込んだこととなります。そこでイエス様は、十二使徒を選ばれたのです。

「使徒」という名称は、「遣わされた者」という意味があります。したがって、ギリシヤ語を読めば、「遣わす」という動詞が出てくれば、「使徒した」と訳すことのできるものです。したがって、使徒の働きをしている者たちは、十二人以外の他に大勢にいました。けれども、ここでイエス様が選ばれている十二使徒は特別な意味合いがあります。それは、神の共同体、神の国の秩序としての使徒たちです。イスラエルが十二部族であったことを思い出してください。神はヤコブを選ばれて、彼から十二人の息子を生み出すようにし、それから十二部族による国を造られました。この国を神は高く引き上げることによって、国々がまことにイスラエルの神こそが、全地の主であることを認めることができるようにするためでした。

イエスの御言葉の権威による新しい秩序、神の国は、今、これら十二人の使徒によって始まるのです。ルカによる福音書には、他の福音書よりも数多く「使徒」の言葉が使われています(6:13,9:10,11:49,17:5,22:14,24:10)。それもそのはず、このルカが「使徒の働き」をこれから書き記すからです。そして使徒の働きにおいて、彼らに権威をイエスが授けて教会を打ち立てられました。教会の人たちは、使徒たちの教えを堅く守ることをその活動の一環にしていました。教会の重要な決定は、エルサレムにおける会議に見られるように、使徒たちを通して決定されました。

そして使徒 6 章において、毎日の配給において、ギリシヤ語を話すユダヤ人のやもめが軽視されているとの声が上がった時に、七人の執事を立てて、使徒たちは「もっぱら祈りとみことばの奉仕に励む」ことを話しました。これが彼らの働きであり、イエスの権威と力を正しく理解して、それに導かれていく知恵が与えられることがその務めでした。ゆえにエペソ 2 章の最後に、「あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。(20 節)」とあったのです。使徒たち本人も独裁者になることはなく、例えば使徒 11 章では、コルネリオと食事をしたことについて割礼派の者たちが非難したのですが、彼は順序正しく説明しました。権威はあくまでも神ご自身にありました。

そして、今はこの教会にイエスは天の御国の鍵を与えておられ、ついにキリストご自身に戻ってこられた後に、天においてそれぞれに冠が与えられて、キリストの裁きの座に着く者たちとなり、そしてキリストが地上に戻ってこられたら、キリストと共に地上を統べ治める者となるのです。その時

にも使徒の権威は存在します。「わたしの父がわたしに王権を与えてくださったように、わたしもあなたに王権を与えます。それであなたがたは、わたしの国でわたしの食卓に着いて食事をし、王座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。(22:29-30)」そして新天新地において、天のエルサレムは門がイスラエルの十に部族の名が記されており、都の土台石が十二使徒の名が刻まれている宝石になっているのです。

パウロは、自身、イエスご自身の権威による使徒となったものですが、しかしエルサレムにいる使徒たちの存在を決して無視せず、いやむしろ彼らに対して責任ある働きを行いました。彼は教会の権威を尊びました。アンティオケの教会から遣わされたので、アンティオケの教会に戻って、神の恵みを報告し、エルサレムに行った時は同じようにして神の恵みを報告しました。そしてエルサレム会議において決まったことを、異邦人の多くいる教会にも守らせようとしてしました。必ず教会の権威があって、それから自分の宣教活動を行っていました。

したがって私たち、現代の教会も、同じようにイエスご自身が賦与された使徒たちご自身の権威の中に生きるように命じられています。私たちは使徒の権威継承というと、バチカンであるとか、ローマ・カトリックを連想するかもしれません。しかし、彼らが勝手に作り出しただけであって、使徒の権威を守ることにとても大切な教えです。私たちは、この聖書自体が使徒の教えであると確信しています。そして、使徒の教えを守り、祈りをし、パンを裂き、交わりをするその共同体にこそ、十二使徒による神の統治の中に、今いることができ、そこでイエスが展開された、ご自分の権威と力による神の国が広がっていくのです。

私たちはとかく、「自分」がいて、そして「聖書」があって、そしてそこに書かれてある教えを自分に当てはめようとする自己修養を目的とします。そして、ここに書いてあることができていないといって自分を責めたり、また自分が何か活動をしているから自分は立派なクリスチャンだと思ひこみます。そういった自己修練でも、自己実現の場でもないのです。この新しい権威、十二使徒による神の統治と教会による御国の拡大の中に自分が入っているかどうか、大事なのです。自分が修練するのではなく、自分をその権威と御霊の流れの中に置いているかどうか、なのです。

14 すなわち、ペテロという名をいただいたシモンとその兄弟アンデレ、ヤコブとヨハネ、ピリポとバルトロマイ、15 マタイとトマス、アルパヨの子ヤコブと熱心党员と呼ばれるシモン、16 ヤコブの子ユダとイエスを裏切ったイスカリオテ・ユダである。

初代教会の指導的立場に置かれるペテロが筆頭になっています。それから兄弟のアンデレ、ヤコブとヨハネは兄弟で同じく漁師です。マタイは取税人、トマスはあの疑い深い人、そして熱心党员シモンがいますが、熱心党员とはローマを武力で打破するメシヤの存在を信じて、自分たちも武器を取るという考えを持っていました。七十年にエルサレムがローマによって破壊されましたが、そのユダヤ人反乱を指揮していたのが、熱心党员です。対して取税人はローマの犬です。ローマ

によってユダヤ人に徴税していたのを取税人は実際に行ない、しかもその間で自分の懐に一部を入れていました。政治的に正反対の人々であります。イエスに選ばれた、イエスのために全てを捨てた弟子ということ以外は、共通項がないばかりか、対立点があった人々であります。

したがって、私たちが集まり、主を礼拝して交わる中で、自分と気に合った人とだけ会い交わるといのは、神の国の姿ではないことがここから分かります。ただキリストに身を明け渡した者たちというだけで、一つに集まっているのです。キリストの弟子であり、キリストの兵士なのです。非常に明確な神の国の幻があり、その中で信仰の戦いを戦う者たちの集まりなのです。キリスト者の集まりを、決して仲良しサークルにしてはいけません。

そして、使徒たちは自分で選んで使徒となったのではなく、イエス様に多くいる弟子から名指しで選ばれて、それで使徒となりました。私たちは自分でしたいことによって自分で選び、自分の好きな教師を集めて教えるを聞いているのでしょうか、それとも自分がこの集まりに召されているのだ、私はキリストによってここにいるように選ばれたのだ、という意識があるのでしょうか？

さらに、非常に不思議で興味深いのは、イスカリオテのユダをイエスご自身が選ばれているということです。彼がご自身を裏切ることを知っていながら、彼をその中に入れていたということです。これを言い換えるなら、神の国では、神ご自身が許容されているサタンの活動があるということです。天の御国の奥義の譬えの中に、毒麦の譬えがあります。それを抜き取りましょうかと僕が言ったのですが、主人は「いっしょに良い麦も抜き取ってはいけないから、収穫の時まで待ちなさい。」と言われました。初めは分からないのですが、後になって分かってくるものです。イスカリオテのユダの裏切りも、他の弟子たちは最後まで彼が裏切り者であることを見抜くことはできませんでした。

そして終わりの日に、神は悪魔が反キリストに権威と力と位を与えるのをお許しになります。反キリストが獣の国を造り、神のしもべとなった者たちを殺すことも許されます。しかし神はこの獣の国に激しい怒りを下され、最後はキリストの来臨によって彼を滅ぼしてしまわれます。

したがって、私たちはすべてのものを、そのまま鵜呑みにしてはいならないということです。使徒ヨハネは言いました。「愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出てきたからです。(1ヨハネ 4:1)」成熟するというのは、堅い御言葉を食べることができること、すなわちしっかりと御言葉を行なう習慣が身につくこと、善悪を見分ける訓練が身につくことでもあります。

17 それから、イエスは、彼らとともに山を下り、平らな所にお立ちになったが、多くの弟子たちの群れや、ユダヤ全土、エルサレム、さてはツロやシドンの海べから来た大ぜいの民衆がそこにいた。18 イエスの教えるを聞き、また病気を直していただくために来た人々である。また、汚れた霊に悩まされていた人たちもいやされた。19 群衆のだれもが何とかしてイエスにさわろうとしていた。

大きな力がイエスから出て、すべての人をいやしたからである。

イエスは弟子たちと共に山に登られていました。そこで一人で祈られて、そして夜明けにその数ある弟子たちの中から十二人を選び、そして平らな地に降りて来ています。イエス様のところにやって来た人々は広範囲に及びます。ガリラヤだけでなく、ユダヤ全土、エルサレムからも来ています。神の選ばれた都、そしてイエス様が十字架に付けられる所でもあります。それだけでなく、ツロやシドンの海からも大勢の民衆が来ていました。ここは異邦人の領域です。ツロやシドンは、富を蓄積する国として、エゼキエルでは倒れることが預言されていた町であります。しかし、ここにキリストを信じる信者たちが後に起こされます。ここに、神の国がエルサレムから始まり、ユダヤ人の間で信じられ、ついに異邦人にまで広がることを予告する出来事が起こっています。

そして、イエスから大きな力が流れ出て、教えを聞き、病気を直していただき、汚れた霊が追い出されました。ここで大事なことは、ここにすでに十二人の使徒たちがいるということです。彼らが共にイエスとして、そしてイエスは後にご自分の権威を授けて、彼らが遣わされてこれらのことを行なうようにされます(9章)。そして使徒の働きでは、もうひとりの助け主である聖霊によって、イエスが彼らと共におられ、これらのことを行なうのです。ここから分かることは、宣教の働きというのはチームだということです。使徒の働きにおいても、使徒たちの手紙においても、主語が「私たち」となっているところが大部分です。私がこのような働きを持っている、というものではありません。したがって、私たちがキリスト者の働きをする時に、チームとなっている仲間はいらっしゃいますか？ジブ自身で行っているのだということではないのです。チームの中で自分の分を果たすのです。

## **2A 平地の垂訓 20-49**

そして次から、有名なイエス様の言葉が始まります。マタイによる福音書では、「山上の垂訓」と呼ばれているものです。しかし、先ほど見ましたようにイエス様は、平らなところにおられました。したがってマタイ伝に記されているものと、ここでイエス様が語られている出来事は異なります。主は、ガリラヤの町々を巡回されて教えておられたので、内容的には同じことをいろいろなところで語られました。

一つ一つの命令が、意味が深く咀嚼すべきものなのですが、イエス様が弟子たちに対してこれらを一挙に語られたことを踏まえて、私たちも全体の流れと、強調点を抑えながら読み進めてみたいと思います。

## **1B 幸いと災い 20-26**

20 イエスは目を上げて弟子たちを見つめながら、話された。「貧しい者は幸いです。神の国はあなたがたのものですから。21 いま飢えている者は幸いです。あなたがたは、やがて飽くことができますから。いま泣いている者は幸いです。あなたがたは、いまに笑うようになりますから。22 人の子のために、人々があなたがたを憎むとき、また、あなたがたを除名し、はずかしめ、あなた

がたの名をあしざまにけなすとき、あなたがたは幸いです。23 その日には、喜びなさい。おどりがたがって喜びなさい。天ではあなたがたの報いは大きいからです。彼らの先祖も、預言者たちをそのように扱ったのです。

「幸い」(マカリオス)とは、深い所で、誰も降れることのできない内側において得ている喜びのことです。それは状況や状態に関わらず存在しているものです。

ここで大事なものは、先に言及した新しいぶどう酒、新しい布切れというのは、こうした状態にある人々のことだということです。主がご自身の国を地上に臨ませる時に、このような状態になっている人々に押し寄せてくるのだということです。「貧しい者」です。この貧しさは、ギリシヤ語では最も困窮している言葉が使われており、ある人は「乞食となっている者は幸いだ」と訳しています。つまり、自分には何もない、良いところは一つない、頼るべきものは自分のうちには何もないのだ、ということを知っている状態です。そして、「飢えている者」です。飢えている者は捜し求めます。他のものに逸れることなく、求めているものから目を離しません。そして「泣いている者」です。これは、自分の罪に対して泣いている、また罪から来る悲劇によって泣いている者たちの姿です。

そしてここで、「いま」という言葉と「やがて」という言葉が繰り返されていることに注目してください。今というのはこの世における状態であります。「やがて」というのは、後に来る世、すなわち神が正義をもって打ち立てる御国のことです。今は、イエスがおられることによって、そして聖霊によって教会を通してイエスがおられることによって、貧しい、飢えている、泣いている時にも与えられる幸いがあります。私たちは、泣いていても、内にはかけがえのない喜びがあります。泣きながら喜べます。それに加えて、「やがて」とありますが、神は地上において御国の市民として生きてきた者に、後の世において報いを与えてくださいます。

そして人の子、キリストのために迫害されることについては、多くを語っておられます。ここがキリストの弟子においてもっとも大きな事になるからです。実に、キリストの証しをするとき、その「証し」というギリシヤ語は殉教を意味する言葉であり、証しが殉教と一つになるほどのものなのです。そこでイエス様の呼びかけは、「喜びなさい。おどりがたがって喜びなさい。」であります。この言葉を聞いていた使徒たちは、後にこれを実践しました。「使徒たちを呼んで、彼らをむちで打ち、イエスの名によって語ってはならないと言い渡したうえで釈放した。そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。そして、毎日、宮や家々で教え、イエスがキリストであることを宣べ伝え続けた。(使徒 5:40-42)」

今日の教会に、このようなマカリオス信仰が薄まってしまっていることは、非常に残念です。しばしば、この世の力がキリスト者やキリスト教会に迫ってくると、その勢力に対して嘆いたり、悲しんだり、怒ったり、そして落ち込んだりします。もちろんこの世において患難があり、それらは悲しむ

べきもの、嘆かわしいものです。しかし、私たちは敗北者ではなく、圧倒的な戦闘力をもって世の国に爆撃をしている神の御国の兵隊たちなのです。私たちには、困難があろうともマカリオスなのです。それをイエス様は今、ここで言われているのです。教会には、ハデスの門も打ち勝つことのできない天の御国の鍵が与えられています。この信仰を神にあって復興させていかねばならぬのです。

24 しかし、富んでいるあなたがたは、哀れな者です。慰めを、すでに受けているからです。25 いま食べ飽きているあなたがたは、哀れな者です。やがて、飢えるようになるからです。いま笑っているあなたがたは、哀れな者です。やがて悲しみ泣くようになるからです。26 みなの人にほめられるときは、あなたがたは哀れな者です。彼らの先祖は、にせ預言者たちをそのように扱ったからです。

神の御国の到来とは、この世において逆転現象を起こします。イエス様は再び「いま」という言葉と、「やがて」を繰り返しています。いま、世の基準で幸いを受けている人々は哀れな目に遭います。そして 26 節において、神から御言葉を預かっている者たちは、世において受け入れられていれば偽預言者であり、いま、嫌われているのであれば真の預言者であります。自分を高くする者は低くされ、低くされている者が高くされます。神はこのようにすることによって、すべての者が神をあがめて、神の憐れみを受けるようにさせるのです。

このように、キリストの与えるマカリオスは世の幸せとは真逆のものであり、神の国とこの世とはせめぎ合いの戦いをしています。このことにいつ気づくか、が大事なのです。私たちの考えているキリスト者の歩みは、どういうものでしょうか？花壇の花を見て、小川が流れているのを求めているでしょうか？それとも、圧倒的な火力を保持している軍が、敵陣に猛攻撃をしている、その最前線の兵士としていないでしょうか？私たちは、後者なのです！このことに気づけば、私たちが徹底的に司令官であるイエス・キリストの前に自分の全てを明け渡し、この方に生きていただき、この世が決して与えることのない幸いと喜びに満たされ、たとえ打ちひしがれてもキリストのご臨在と励ましによって立ち上がり、罪や過ちを犯してもすぐに悔い改め、キリストと共に歩むのです。

残りの部分も長くなりますから、次回学びましょう。